外国語教育メディア学会（LET）
関西支部 2023 年度春季研究大会
プログラム

日　時：　2023 年 5 月 27 日（土）10：15 ～ 17：20

場　所：　京都大学 吉田南キャンパス　国際高等教育院棟
Kyoto University Yoshida South Campus
ILAS Building
〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町
https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/access/campus#yoshida
https://www.t.kyoto-u.ac.jp/ja/access/yoshida/index.html

主　催：　外国語教育メディア学会（LET）関西支部
http://www.let-kansai.org/

事務局：　外国語教育メディア学会（LET）関西支部事務局
〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35

プログラム

9:45-15:50　**受付**■ 国際高等教育院棟１階

10:15-16:00　**賛助会員展示**■　国際高等教育院棟３階

10:15-10:30　**開会行事**■ 講義室 31

司会◆ 田村 祐（事務局長・関西大学）
挨拶◆ 名部井 敏代 （支部長・関西大学）

10:40-12:00　**ワークショップ１**■ 講義室 31　（ハイブリッド形式・オンライン参加可）

そこに AI はあるんか？－ ChatGPT による外国語教育実践・研究の革新

講師◆ 水本 篤（関西大学）
司会◆ 鬼田 崇作（同志社大学）

ワークショップ２■ 講義室 32　（対面形式）

外国語教育研究のための会話分析入門：トランスクリプト作成法からの出発

講師◆ 横森 大輔（京都大学）
司会◆ 金丸 敏幸（京都大学）

12:00-13:00　**昼食**■１階ロビー

13:00-13:20　**支部総会**■ 講義室 31

13:30-15:40　**研究発表・実践報告・教材開発**　① 13:30 - 14:00　② 14:10 - 14:40　③ 14:50 - 15:20

第１室（研究発表）■ 講義室 31

司会◆ 濱田 真由（神戸大学）

① 中学生英語学習者のエンゲージメント、英語学習動機づけ、社会的要因に関する実証研究
西田 理恵子（大阪大学）高木 智記（枚方市立長尾中学校）

② 機械翻訳支援型ライティング：日本人英語学習者が機械翻訳から受ける恩恵
田村 颯登（関西大学 大学院生）山田 優（立教大学）

③ 対面参加者と遠隔参加者のハイブリッド・グループワークにおける相互行為分析
福島 祥行（大阪公立大学）

	第２室（実践報告・Classroom Tips）■ 講義室 32 司会◆ 鬼田 崇作（同志社大学） ① Microsoft Azure で合成音声を作り込む 東 淳一（神戸学院大学） ② Quizizz を利用した語彙習得のための帯学習 真島 由朱（大阪府立桜塚高等学校） ③ Digital Games as a Learning Tool in the Language Classroom Michael Hofmeyr（大阪大学）
15:10-15:40	**休憩（意見交換会および業者展示）**
15:40-17:10	基調講演■ 講義室 31　（ハイブリット形式・オンライン参加可） **「日本の英語教育の学術トレンド：社会学的考察」** 司　　会◆ 森田 光宏（広島市立大学） 講　　師◆ 寺沢 拓敬（関西学院大学）
17:10-17:20	**閉会行事■ 講義室 31** 司会◆ 田村 祐（事務局長・関西大学） 挨拶◆ 今井 由美子（副支部長・同志社女子大学）

お知らせ

- 参加者は必ず以下の URL から Peatix にアクセスし、事前に参加申し込みをしてください。

  https://let-kansai-2023-spring.peatix.com

- オンライン参加者には、前日までに Zoom のリンクを送信いたします。
- 対面での参加者は，受付にて必ずネームホルダーをお受け取りください。
- 当日キャンパス内の学食は開いておりません。大学周辺のレストラン等をご利用ください。お弁当お持ちの方は、1 階ロビーをご利用ください。
- キャンパス内は全面禁煙です。
- 会場では eduroam のアカウントで Wi-Fi 接続が可能です
- 新型コロナウイルス感染拡大予防のため、発熱・咳などの症状がある方は来場をお控えください。
- マスク着用については京都大学の方針により、個人の判断に委ねることを基本とします。内閣官房・新型コロナウイルス感染症対策本部の「着用が効果的な場面」等を参考に行動してください。

スーパー英語.com
The English Language Materials Bank

スーパー英語 .com が企画・編集した英単語帳発売 !!

学生・ビジネスマン
必読！
赤セルシート付

世界史で学ぶ教養の英単語

青山学院大学教授　永井忠孝

定価1980円（本体1800円+税10%）

ダイヤモンド社

Academic Express 3

Academic Express 3 と組み合わせることで
語彙学習や理解度問題が連携可能。お楽しみに！

世界史の教養を身につけながら、IELTS と TOEFL® テストの頻出単語を学ぶ
『世界史で学ぶ教養の英単語 IELTS&TOEFL® テスト頻出単語 2120 語』
IELTS と TOEFL® テストの過去の 20 年のデータを徹底分析！

すべて英語で学べます

- ▶レスラーから哲学者に転身した歴史上の人物は？（答は32ページ）
- ▶みずから毒蛇に噛まれて亡くなった女王は？（答は64ページ）
- ▶コロンブスがアメリカに到達するきっかけを作った旅行家は？（答は104ページ）
- ▶キジ狩りがもとで命を落とした女帝は？（答は158ページ）
- ▶江戸幕府倒幕を支援したスコットランド商人は？（答は192ページ）
- ▶ノーベル賞を二度受賞した世界初の人物は？（答は238ページ）
- ▶特許局に勤めながら大発見をした科学者は？（答は256ページ）
- ▶父の命日に死亡したイギリス首相は？（答は262ページ）
- ▶保険会社に勤めて無名のまま亡くなった世界的文豪は？（答は272ページ）

歴史上の偉人を英語で知っていますか？

Nebuchadnezzar II	Julius Caesar
Pythagoras	Muhammad
Aristotle	Genghis Khan
Confucius	Charlemagne
Gautama Buddha	Johannes Gutenberg
Emperor Shi Huang of Qin	Johann Wolfgang von Goethe
Cao Cao	Sigmund Freud

著者 (青山学院大学教授 永井忠孝)よりメッセージ

本書は、英語を学びながら教養を学ぶ本です。効率的に英単語を学んでいるつもりが、実は効率的とはいちばん縁遠い、でも本当は効率よりはるかに大切な、教養を学んでいる本です。英単語集の体裁をとることで、本は読まないが英語は勉強したいという昨今の多くの人々に読んでもらうことをねらっています。

本書は 150 の英文と対応する和文によって構成されます。各文章は、世界の人物や思想、歴史的な出来事を記述しています。1 つの英文を読みながら、8 ～ 10 語のアカデミック英単語を身に着けていきます。本書を読むことによって、英単語を学びながら、世界や歴史についての教養を身につけ、ひいては英語を学ぶことよりも読書を通して教養を身につけることの大切さを知ってほしい、というのが著者の願いです。

interface

詳しくはこちらへ
https://www.supereigo.com/sekaishi-eitango.html

「そこに AI はあるんか？」
ーChatGPT による外国語教育・研究の革新ー

水本 篤（関西大学）

このワークショップでは、2022 年 11 月 30 日に公開されて以来、世界中で大きな反響を呼んでいる ChatGPT を取り上げます。ChatGPT は大規模な言語モデルを用いて、様々な質問に対する回答を行うチャットボットですが、その利用によって、外国語学習の効果を高めるだけでなく、私たちの教育現場での教材開発や、研究活動を効率化するために使用できると期待できます。ワークショップの参加者は、ChatGPT を活用して外国語教育・研究に変化をもたらす方法について解説を受けるとともに、教材作成や論文執筆における ChatGPT 活用の方法をハンズオンで学びます。ワークショップではさらに、具体的な活用事例（Mizumoto & Eguchi, 2023; 竹ノ内, 2023）や、考えうる問題点（Cotton et al., 2023; Kasneci, 2023）も共有し、外国語教育・研究における、ChatGPT、そして、その他の生成 AI のより効果的な活用方法を模索します。

ChatGPT に関しては、最近、少しずつ論文が発表され始めており（Kohnke et al., 2023; Teng, 2023）、現在もその利用方法が、国内外の大学をはじめとする多くの教育現場で検討されている段階です（吉田, 2023）。そのため、参加者同士の意見交換もできる限り多く行う予定です。対面・オンラインを問わず、ご興味のある方はぜひご参加ください。

References

Cotton, D. R. E., Cotton, P. A., & Shipway, J. R. (2023). Chatting and cheating: Ensuring academic integrity in the era of ChatGPT. *Innovations in Education and Teaching International,* 1–12. https://doi.org/10.1080/14703297.2023.2190148

Kasneci, E., Sessler, K., Küchemann, S., Bannert, M., Dementieva, D., Fischer, F., Gasser, U., Groh, G., Günnemann, S., Hüllermeier, E., Krusche, S., Kutyniok, G., Michaeli, T., Nerdel, C., Pfeffer, J., Poquet, O., Sailer, M., Schmidt, A., Seidel, T., … Kasneci, G. (2023). ChatGPT for good? On opportunities and challenges of large language models for education. *Learning and Individual Differences*, *103*, 102274. https://doi.org/10.1016/j.lindif.2023.102274

Kohnke, L., Moorhouse, B. L., & Zou, D. (2023). ChatGPT for language teaching and learning. *RELC Journal*, 003368822311628. https://doi.org/10.1177/00336882231162868

Mizumoto, A., & Eguchi, M. (2023). Exploring the potential of using an AI language model for automated essay scoring. *Research Methods in Applied Linguistics*, *2*(2), 100050. https://doi.org/10.1016/j.rmal.2023.100050

竹ノ内 朋子 (2023).「ChatGPT を利用した英検 2 級のライティング分析」『外国語教育メディア学会(LET) 関西支部メソドロジー研究部会報告論集』*14*, 63–69. https://osf.io/4fmhx/

Teng, F. (2023). Scientific writing, reviewing, and editing for open-access TESOL journals: The role of ChatGPT. *International Journal of TESOL Studies, 5*(1), 87–91. https://doi.org/10.58304/ijts.20230107

吉田 塁 (2023, April 28).「ChatGPT・AI の教育関連情報まとめ」*Lui Yoshida Lab*. https://edulab.t.u-tokyo.ac.jp/chatgpt-ai-resources/

外国語教育研究のための会話分析入門:
トランスクリプト作成法からの出発

横森大輔（京都大学）

1. ワークショップの背景

会話分析(CA)は、人々が他者との相互行為をどのようにして営んでいるかを、実際の録音・録画データの分析に基づいて明らかにする研究枠組みです。CA は、もともと 1960 年代に社会学の一領域として出発しましたが、言語学や人類学をはじめとする関連領域との学際的な交流を経て、独自の発展を遂げています。今日では、CA そのものの研究だけではなく、CA を他分野の研究のためのツールとして利用する可能性への関心が様々な分野において高まっており、実際にそのような研究も生まれてきています。この潮流は外国語教育の分野においても例外ではなく、外国語授業における学習者と教師の相互行為や、学習者同士の相互行為、そして外国語（学習言語）が用いられる教室内外での相互行為の分析などに CA が活かされつつあります。

2. 会話分析という研究枠組みについての検討

その一方、そのネーミングの表面的なシンプルさ（「会話」＋「分析」）とは裏腹に、CA の研究枠組みとしての性質には、理解しにくかったり、誤解しやすかったりする側面があります。本ワークショップの前半部では、CA が「会話を分析すること」一般の中でどのような特徴を有しているのか、結局のところ何をどのように明らかにしようとする学問分野なのかといった点について、参加者の皆さんとのディスカッションを通して建設的な整理の仕方を探りたいと思います。こちらのパートでは、会話分析と談話分析、イーミックとエティック、ツールとしての会話分析、経験科学としての会話分析、会話分析のスキル習得方法といった話題を取り上げる予定です。

3. トランスクリプト作成における注意点とその理論的基盤の検討

また、CA の研究枠組みとしての特徴は、CA 研究を実際に進める場合に欠かせないステップである会話のトランスクリプト作成のあり方に色濃く表れています。別の言い方をすれば、CA についてよく理解することで適切なトランスクリプトが作成できるようになりますし、トランスクリプトの作成法について検討することで CA について理解を深めることができます。本ワークショップの後半では、大学の英語授業内で実施されたグループワーク場面の映像を題材に、トランスクリプト作成のエクササイズに取り組み、それを通じて CA によるデータ分析の特徴とその強みについて検討したいと思います。こちらのパートでは、トランスクリプションとコーディングの違い、開かれたシステムとしてのトランスクリプト記法、ポーズとオーバーラップ、韻律とパラ言語的特徴、身体性とマルチモダリティー、ELAN とその功罪、といった範囲をカバーする予定です。

References

平本毅・横森大輔・増田将伸・戸江哲理・城綾実（編）(2018).『会話分析の広がり』, ひつじ書房.
串田秀也 (2006).「会話分析の方法と論理 : 談話データの「質的」分析における妥当性と信頼性」, 伝康晴・田中ゆかり（編）『講座社会言語科学 6 方法』, ひつじ書房(pp. 188-206).
串田秀也・平本毅・林誠 (2017).『会話分析入門』, 勁草書房.
Sidnell, J. & Stivers, T. (Eds.). (2013). *The handbook of conversation analysis*. Wiley-Blackwell.
高木智世・細田由利・森田笑 (2016).『会話分析の基礎』, ひつじ書房.

中学生英語学習者のエンゲージメント、英語学習動機づけ、社会的要因に関する実証研究

西田　理恵子（大阪大学）
高木　智記（枚方市立長尾中学校）

キーワード： 中学生英語学習者，エンゲージメント，英語学習動機づけ

1. はじめに

本研究では，まだこれまでに明らかになっていない中学生英語学習者のエンゲージメント（ペア・グループ），英語学習動機づけ，社会的要因（家族・教師・クラスメート）の全体傾向や要因間の関係について，量的・質的研究方法を用いて明らかにすることにある。

2. リサーチクエスチョン

本研究の目的は，①中学生英語学習者のエンゲージメント，英語学習動機づけ，社会的要因について中学校全体と学年別ではどのような傾向があるのかを探り，②中学生英語学習者のエンゲージメント，英語学習動機づけ，社会的要因の要因間を明らかにし，③エンゲージメントと英語学習動機づけに関わる予測因子を明らかにし，④中学生英語学習者が好むタスクや継続していきたいタスクは何かを探ることにある。

3. 参加者と手順

調査実施期間は，2022 年 1 月～3 月であり公立中学生 325 名を対象としてオンラインにて実施した。

4. 結果と考察

表 1. 全体傾向を示す記述統計

	N	Min	Max	*M*	*sd*	Skewness	Kurtosis
Family Support	325	1.00	5.00	3.76	0.97	-0.63	0.02
Teacher Support	325	1.00	5.00	3.87	0.89	-0.85	0.67
Peer Support	325	1.00	5.00	3.56	0.96	-0.38	-0.22
Engagement (Gr)	325	1.00	5.00	3.83	1.05	-0.94	0.46
Engagement (Pr)	325	1.00	5.00	3.52	1.14	-0.47	-0.57
English Motivation	325	1.00	5.00	3.25	1.00	-0.08	-0.68

記述統計，相関分析，重回帰分析，多変量分散分析を行った。全体傾向としては，多変量分散分析を行った結果，2 年生 3 年生の方が 1 年生と比較してエンゲージメントが高い傾向があることが明らかになり，また 3 年生が 1 年生よりも高い理想自己を持っていることが明らかになった。相関分析を行った結果，英語学習動機づけと社会的要因（家族・教師・クラスメート）の間に強い相関があり，エンゲージメントも同様に社会的要因と強い正の相関関係にあることを明らかにした。重回帰分析では，エンゲージメントの予測因子は教師の励まし・クラスメートの励ましであり，英語学習動機づけの予測因子は，努力であることを明らかにした。さらに，中学英語学習者が好む・好まないタスク・継続したいタスクを明らかにしている。本発表では，研究結果に関する分析の詳細を提示する予定である。

参考文献

Mercer, S., & Dörnyei, Z. (2021). *Engaging language learners in contemporary classrooms.* Cambridge University Press.

機械翻訳支援型ライティング：
日本人英語学習者が機械翻訳から受ける恩恵

MT-assisted writing: What Japanese learners of English benefit from MT

田村　颯登（関西大学 大学院生）
山田　優（立教大学）

キーワード： 機械翻訳，ライティング，MTILT，機械翻訳支援型ライティング

1. はじめに

英語教育現場における機械翻訳（MT）の取り扱いについて議論される機会が増えた。海外では MT をライティングに用いた際に効果的であるとの結果が出ているが（Lee, 2023）、日本においてはいまだ同様の調査は少ない（田村・山田, 2021）。また、近年の高品質な MT に鑑みると、英語教育への活用方法は、MT が生成する英文を模範と見立てる good model としての積極的使用（Niño, 2008）も考えられる。これをライティングに応用することが筆者らの言う「MT 支援型ライティング」である。本研究では、この MT 支援型ライティングにおいて、日本人英語学習者（大学生）が MT から受ける影響を調査する。

2. 参加者と手順

私立大学に通う日本人英語学習者 32 名に実験参加を依頼し、まず、日本語で作文をしてもらい、それを元にした英語ライティング、日本語文を訳した MT 訳、その MT 訳を参照して英語ライティング編集したものの 3 種を収集した。ライティングのデータは正確性、統語的・語彙的複雑性に主な焦点を当て、それぞれ Grammarly、VocabProfiler、TAASSC（Kyle, 2016）を用いて量的に分析した。

3. 結果と考察

分析の結果、言語的側面のレベルが向上していることから、good model としての使用が可能であることを示している。ただし、各人のライティングを観察すると MT 訳の使い方に違いがあり、ほとんどがコピー&ペーストで構成されたものも存在した。MT を使って英文作成をすれば品質が向上するのは自明と言えるが、その詳細を示したという点においては、教育的示唆に富む実証結果を含んでいる。

参考文献

Kyle, K. (2016). *Measuring syntactic development in L2 writing: Fine grained indices of syntactic complexity and usage-based indices of syntactic sophistication* (Doctoral Dissertation). Georgia State University. Retrieved from http://scholarworks.gsu.edu/alesl_diss/35

Lee, S. M. (2023). The effectiveness of machine translation in foreign language education: a systematic review and meta-analysis. *Computer Assisted Language Learning*. *36*(1-2), 103–125. https://doi.org/10.1080/09588221.2021.1901745

Niño, A. (2008). Evaluating the use of machine translation post-editing in the foreign language class. *Computer Assisted Language Learning*. *21*(1), 29–49. https://doi.org/10.1080/09588220701865482

田村颯登・山田優（2021）.「外国語教育現場における機械翻訳の使用に関する実態調査：先行研究レビュー」 *MITIS Journal*, *2*(1), 55–66. http://jaits.web.fc2.com/Yamada_Tamura_3.pdf

対面参加者と遠隔参加者のハイブリッド･グループワークにおける相互行為分析

Interaction analysis in group work involving face-to-face and remote participants

福島　祥行（大阪公立大学）
Fukushima, Yoshiyuki（Osaka Metropolitan University）

キーワード： 相互行為分析，グループワーク，ハイブリッド，協働学習

1. はじめに

福島（2015），福島（2016）では，グループワークにおける協働学習 collaborative learning の相互行為分析において，学習者たちはどのように相互行為をおこない，そのなかでどのようにリフレクションしているかについて分析したが, これは全員が対面参加の状態を前提としたものであった。しかしながら，Covid-19 予防対策として遠隔参加システムが普及したことにより，全員が対面参加や全員が遠隔参加といった形式のみならず，対面を主としつつ遠隔でも参加というハイブリッド形式の授業が容易に可能となった。これをふまえ，福島・中條・大山（2022）では積極的なハイブリッドの提言をおこなったが，今年度も，数名の受講生が Covid-19 に罹患したり濃厚接触者となったりすることによる自宅学習を余儀なくされつつも，Zoom をもちいて対面授業に「参加」しえている。そこで，このような対面参加者と遠隔参加者が混淆したグループワークにおける相互行為はどのようなものであり，ふつうの対面グループワークに比較して，学習やリフレクションのありように異なる部分があるかについて検討した。

2. 分析対象と手法

フランス語初修者のクラスにおける 4 名のハイブリッド・グループワーク（3 名が対面参加，1 名が遠隔参加）の様子を，360°カメラと Zoom の録画機能によって記録し，その相互行為を分析した。参加者は机を向かいあわせて島形にすることより相互行為がしやすい形式をとっているが，遠隔の参加者をくわえるため，Zoom の画面を提示したタブレットを一角に配し，また，タブレットのカメラが対面参加者たちをすべておさめられるようにした。

図 1. グループワーク。破線内がタブレット

3. 結果と考察

相互行為分析の結果，タブレットの小さな画面に提示されるだけであっても，遠隔参加者の存在は，対面参加者と同等の存在として遇され，全員が対面参加のグループワークに比して，学習の機序やリフレクションの惹起において特に変わることがないことが確認できた。

参考文献

福島祥行（2015）. 協働学習における「学習者」の構築――フランス語初修者の相互行為分析から――『人文研究』66, 153-171.

福島祥行（2016）. グループ・ワークにおけるふりかえりの生成――フランス語初級クラスの相互行為分析から―― 『Revue Japonaise de Didactique du Français』11, vol.1・2, 29-45.

福島祥行・中條健志・大山大樹（2022）. グループワーク実践 truc 2021 『RENCONTRES』36, 45-49.

Microsoft Azure で合成音声を作り込む

Craftsmanship of Creating TTS Voices with Microsoft Azure Service

東　淳一(神戸学院大学)
Azuma, Junichi (Kobe Gakuin University)

キーワード： 音声合成, Microsoft Azure, GUI, ElevenLabs, 韻律の制御

1. はじめに

最近話題の ElevenLabs は AI 駆動の多彩な韻律をもつ合成音生成、音声の Cloning 等の新しいサービスで脚光を浴びているが、SSML 等を利用し自由に韻律を制御することは不可能である。これに対して Microsoft Azure は 48kHz サンプリングの高品質音声を提供し、GUI 環境で多彩な韻律制御ができるシステムを提供する。本報告はこの Microsoft Azure（Audio Content Creation）で高品質な英語合成音声を作り込む方法についてデモも行いつつ解説する。

2. ElevenLabs の衝撃

東淳一 (2022)記載のとおり、2020 年度から 2021 年度にかけてはコロナ禍のため大学でもオンライン授業に依存せざるを得なくなった。その過程で LMS に TTS 合成音を組み込んだオンデマンド型の授業には少なからぬ注目が集まった。ところで、その後ほんの 3 年で主要なクラウド型の TTS 合成音作成サービスには大きな進展があった。その中でも特筆すべき進化を見せたのが Microsoft Azure のサービスである。2021 年 8 月には 2024 年 8 月までに標準音声は完全に姿を消し、すべての音声がニューラル音声になることがアナウンスされた。その後次々とニューラル音声が投入され、米語は 25 音声となりサンプリングレートは48kHz となった。また、いくつかの音声については複数の話し方スタイルが導入された。たとえば米語 Aria（女声）では 17 のスタイルが導入されている。スタイルは単にニュース放送、カジュアルといったものだけではなく、怒った、悲しい、ささやき、叫ぶ等さまざまな感情表現も可能となっている。ところが、2023 年になって ElevenLabs が登場し、簡単に高品質で多彩な表情を表出できる TTS 合成音生成が可能になった。特筆すべき点は有料版でクローン音声を作れることであり、静寂な環境で録音した数分の英語の音声を登録すれば、「自分の声」が使える合成音声に登録される。

3. ElevenLabs の問題点と Microsoft Azure に秘められた可能性

脚光を浴びる ElevenLabs であるが、SSML 等を利用して自由に韻律の制御ができない難点がある。Microsoft の場合発話スタイルを選択でき、GUI 環境での韻律の高度な制御が可能である。1 つの素材中で話者を自由に変更できるため、対話や 3 人以上での会話なども自由に作成できる。なお、ElevenLabs 同様に Microsoft においてもテキストおよび合成された音声をクラウド上に保存可能である。

4. Microsoft Azure の音声の作り込み

Microsoft のニューラル音声は 48kHz サンプリングで音質もよい。また、その後日本語でのニューラル音声も増え、教材として利用するには Microsoft のサービスの方が適していると思われる。発表では、デモを通じて Microsoft Azure の音声の作り込み方を解説するとともに、LMS に合成音声素材を埋め込む方法、QR コードを使いさまざまな媒体経由で合成音声を再生させる方法、さらには音声学実験のための高度な音声素材編集法も解説する。

参考文献

東淳一 (2022). TTS 合成音の教育および研究での活用について『音韻研究』25, 161-172.

Quizizz を利用した語彙習得のための帯学習

Warm-up activity for vocabulary acquisition using Quizizz

真島　由朱（大阪府立桜塚高等学校）

キーワード：語彙習得,帯学習,オンラインクイズツール,ゲーミフィケーション,Quizizz

語学において避けることのできない語彙学習は、非常に重要ながらこつこつと根気強く反復学習を繰り返すことが必要な点で、特に初学者にとって独力では続けにくいものである。反復による語彙の定着を生徒にとって受け入れやすい形にすべく、オンラインクイズツール Quizizz を毎回の授業に帯学習として取り入れた。発表者の実践例に基づき、効果的な語彙習得とそのためのツールについて皆さんと情報共有したい。

Digital Games as a Learning Tool in the Language Classroom

Hofmeyr, Michael（Osaka University）

キーワード : digital game-based language learning (DGBLL), learner attitudes, second language acquisition (SLA), tips for implementation

The gamification of classroom learning tasks has attracted the attention of many CALL researchers and practitioners over recent years. While the integration of game-like elements into traditional classroom activities could increase learner engagement, an alternative and potentially more effective approach to achieving the same end may be to simply exploit the educational potential of existing digital games that were designed purely as entertainment. This presentation will briefly summarise the findings of two empirical case studies investigating the potential for language learning of one particularly promising cooperative digital game: *Keep Talking and Nobody Explodes*. The findings from a survey study examining the attitudes and beliefs held by Japanese university students towards digital game-based language learning (DGBLL) in general will also be presented. After demonstrating how in-class digital game-based interaction can effectively facilitate second language acquisition and showing that Japanese learners are already generally open to DGBLL as a pedagogical approach, step-by-step instructions and practical tips will be provided for incorporating this game, as well as other games belonging to different genres, into the foreign language classroom.

日本の英語教育の学術トレンド：社会学的考察

寺沢拓敬（関西学院大学）

日本の英語教育研究のあり方について、事実レベル（どうなっているか？）と規範レベル（どうあるべきか？）の観点から順番に論じる。いずれの論点も社会学な枠組みに基づいて考察する。つまり、英語教育・応用言語学の学界や研究者は、完全に自律的に、専門知識を産み出しているわけではなく、むしろ、そうした知識は社会的文脈に大いに拘束されるという認識枠組みである。

1. 英語教育研究の学術トレンド

国内外の英語教育系の学会発表要旨をテキストマイニング（構造トピックモデル）によって分析した筆者の研究（査読中）によれば、日本の英語教育研究には以下のような特徴がある。

(1) 海外学会と比較して、国内志向の強い英語教育学会（例、JASELE）では、特定の言語現象に焦点化した言語分析志向の研究が多い。一方で、言語現象を社会的文脈に置き直して理解する研究（例、学習者のアイデンティティ）は少ない。
(2) 同じく、学校教育制度を前提にした研究が多い一方で、制度の枠の外にある事象や制度化が進展途上の事象を扱った研究（例、教師の自律的成長、オンライン授業）は少ない。
(3) 同じく、近年の教育改革に敏感に反応したと考えられる研究が多い。これは、教育や社会の変化の短期トレンドに影響されやすいことを意味している。

3 つの特徴から示唆されるのは、日本の英語教育研究では、社会的要因との連関を検討した研究が少なく、あったとしても短期的≒場当たり的なもので、理論的な蓄積は乏しいということである。1970 年代の英語教育学の萌芽期においては、社会科学も含めた総合的研究（言葉の正確な意味での「学際的研究」）が構想されていたが（垣田, 1978）、現状、それは実現していない。

2. 学会制度・教育政策・運動をめぐる「べき論」

しかしながら、学界・研究者が社会的トピックを取り扱う際、上記の学術トレンドは脆弱性となり得る。なぜなら、学界・研究者が社会変動・教育改革に直面しても、研究蓄積がなければ、建設的な批判は困難だからである。理論的インフラがなければ、蔓延している紋切り型の主張に追随する（＝俗情との結託）だけか、追随しないまでも心情的・党派的な批判しかできなくなる。

英語教育研究者の社会的な活動のあり方に関してヒントとなるのが、批判的言語研究（Kubota, 2022）および日本語教育の動向（牲川ほか, 2019）である。いずれも、「知識生産者としての研究者→受容者としての社会」のような一方通行的アウトリーチモデルではなく、よりダイナミックかつ参画的なモデルを提供しており、参考になる。とりわけ重要な論点が、前者は、応用言語学者自身の（コンサルタントではなく）運動家としての役割を論じている点、後者は、教育実践を教育施策を超えたより広い枠組み（労働政策、移民政策、福祉政策）に位置づけている点である。

垣田直巳 (1978). 「英語教育学について」垣田直巳編『英語教育学研究ハンドブック』(pp.xv-xxxvi) 大修館書店

Kubota, R. (2022). Linking research to transforming the real world: Critical language studies for the next 20 years, *Critical Inquiry in Language Studies, 20*(1), 4-19.

牲川波都季・有田佳代子・庵功雄・寺沢拓敬 (2019). 『日本語教育はどこへ向かうのか：移民時代の政策を動かすために』くろしお書店